

令和5年度 全国学力・学習状況調査の結果について

学びの改革支援課

- 令和元年度から、知識と活用（A・B問題）を一体的に問う調査問題となりました。また、中学校英語は4年ぶりに実施されました。
- 小学校国語及び中学校数学は、平均正答数が全国と同程度となりました。小学校算数及び中学校国語、英語は、平均正答数が全国を下回りました。
- 今年度新たに、英語について「全国学力・学習状況調査の結果分析・活用」ワーキンググループを立ち上げ、大学教授等の助言を受けながら、パフォーマンステストを含むテスト改善に取り組んでいきます。
- 国語、算数・数学、英語の「重点対策チーム」において、調査結果を県としての強みや課題という視点から詳細に分析し、授業改善に係る参考資料を作成・配付するなどして、より具体的に学校を支援していきます。

1 実施状況

学 校	当日実施学校数（集計対象学校数）	当日実施児童数（小6）・生徒数（中3）
公立小学校	353校（内特別支援学校2校）	15,800人
公立中学校	185校（内特別支援学校3校）	15,277人
公立小・中学校計	538校（内特別支援学校5校）	31,077人

※当日実施児童・生徒数は、回収された解答用紙が最も多かった教科の解答用紙の枚数で算出。

2 長野県と全国の平均正答数と平均正答率の比較（公立）

[上段]：平均正答数／設定問題数 [下段]：平均正答率

校種	年度 教科	令和5年度		年度 教科	令和4年度（英語 令和元年度）	
		長野県	全国		長野県	全国
小学校	国語	9.3／14問 66%	9.4／14問 67.2%	国語	9.2／14問 66%	9.2／14問 65.6%
	算数	9.7／16問 61%	10.0／16問 62.5%	算数	9.8／16問 62%	10.1／16問 63.2%
中学校	国語	10.3／15問 69%	10.5／15問 69.8%	国語	9.6／14問 68%	9.7／14問 69.0%
	数学	7.5／15問 50%	7.6／15問 51.0%	数学	7.1／14問 51%	7.2／14問 51.4%
	英語	7.3／17問 43%	7.7／17問 45.6%	英語	11.3／21問 54%	11.8／21問 56.0%

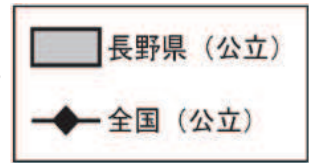
※文部科学省において、平均正答率の微少な差異は実質的な学力面の違いを示すものではないため、都道府県の結果は小数点以下を四捨五入した整数値としている。

※中学校英語の調査結果は、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の合計を集計。CBTで行われた「話すこと」調査は含まれない。

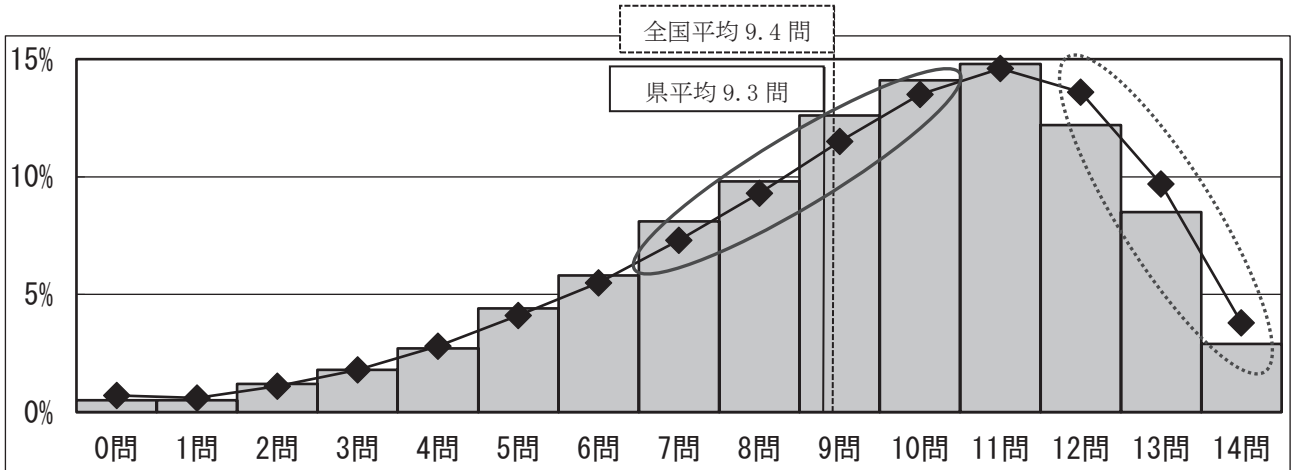
3 長野県と全国（公立）との正答数分布グラフの比較

小学校

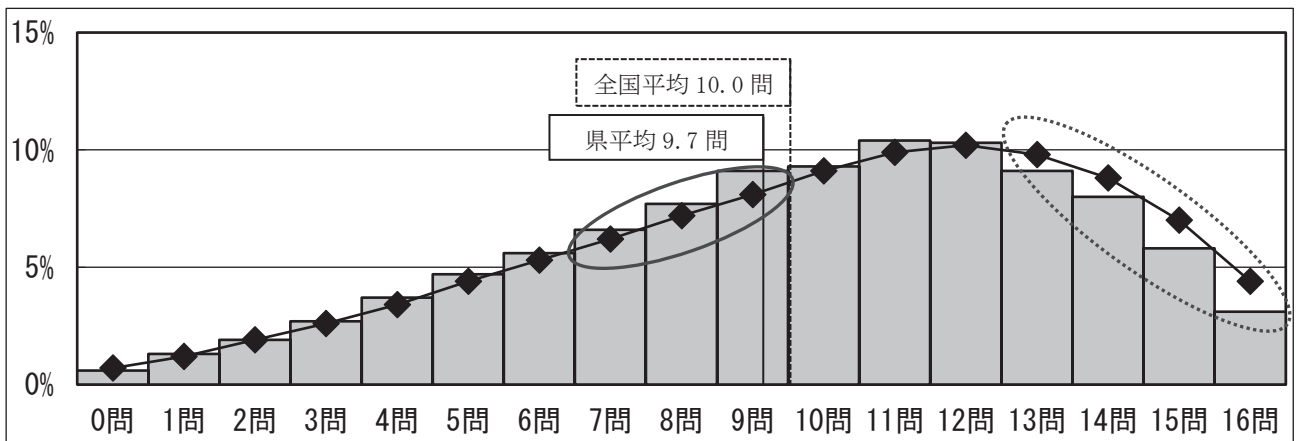
国語と算数の正答数の分布は、全国とほぼ同様の傾向である。国語では、正答数が7問から10問の児童の割合が全国平均よりも高く、正答数が12問以上の児童の割合が全国平均よりも低い。算数では、正答数が7問から9問の児童の割合が全国平均よりも高く、正答数が13問以上の児童の割合が全国平均よりも低い。



【国語】 [正答数分布グラフ（横軸：正答数、縦軸：割合）]



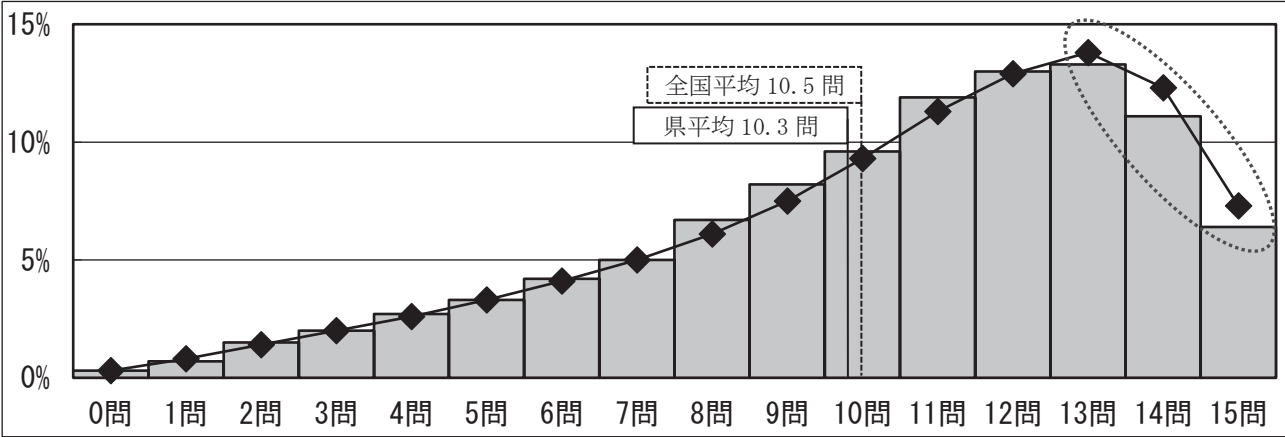
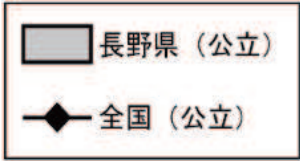
【算数】



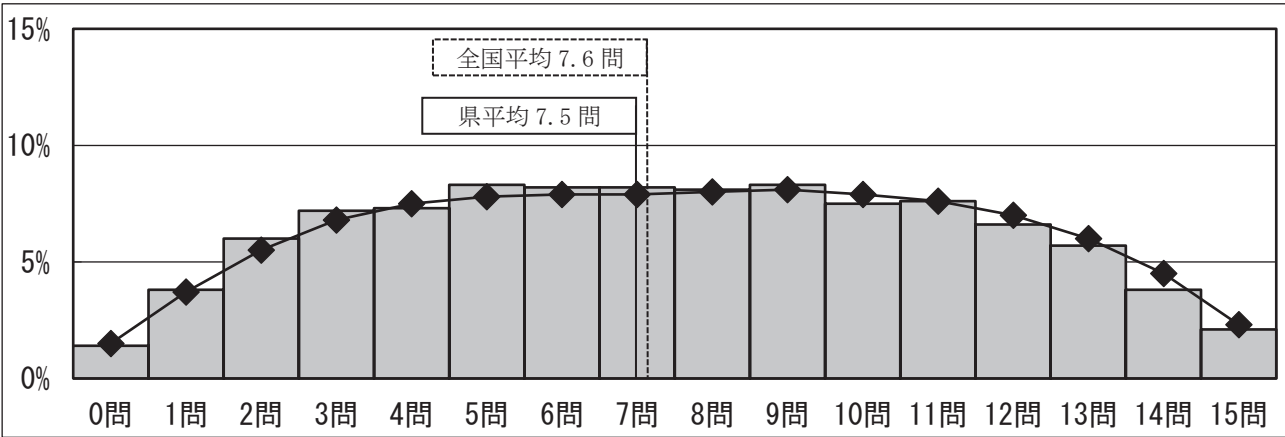
中学校

国語、数学、英語の正答数の分布は、全国とほぼ同様の傾向であるが、国語は13問以上の生徒の割合が全国平均よりも低い。英語は、正答数が4問から8問の生徒の割合が全国平均よりも高く、12問以上の生徒の割合が全国平均よりも低い。

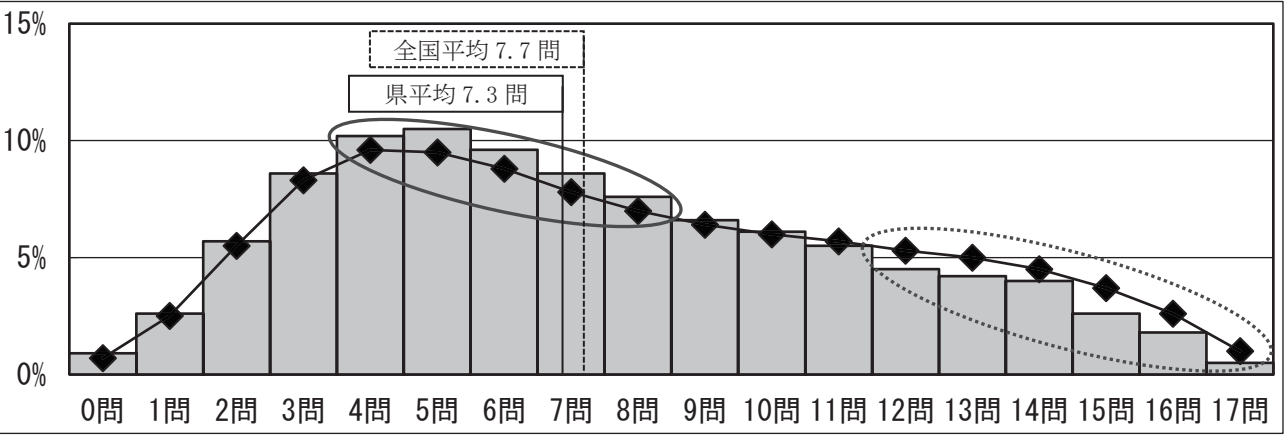
【国語】



【数学】



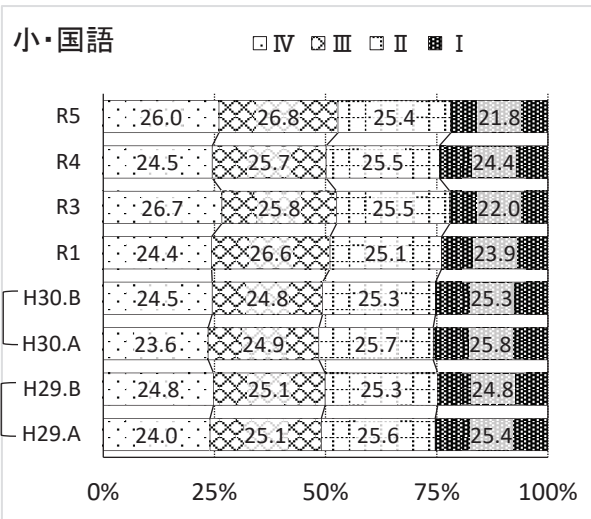
【英語】



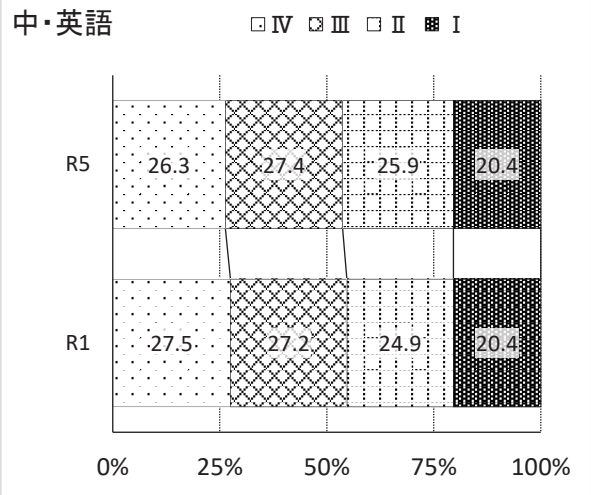
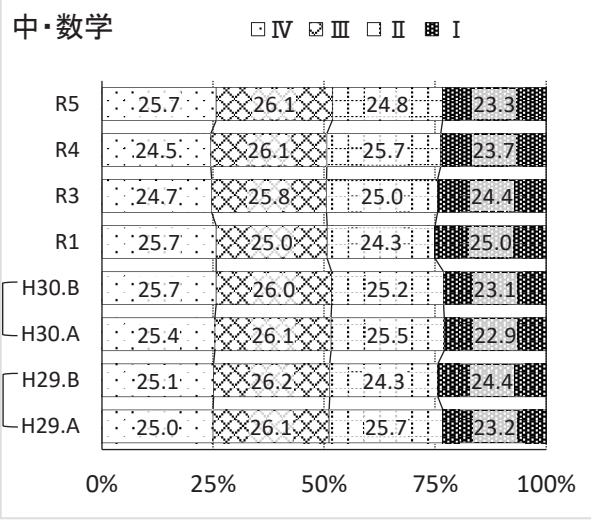
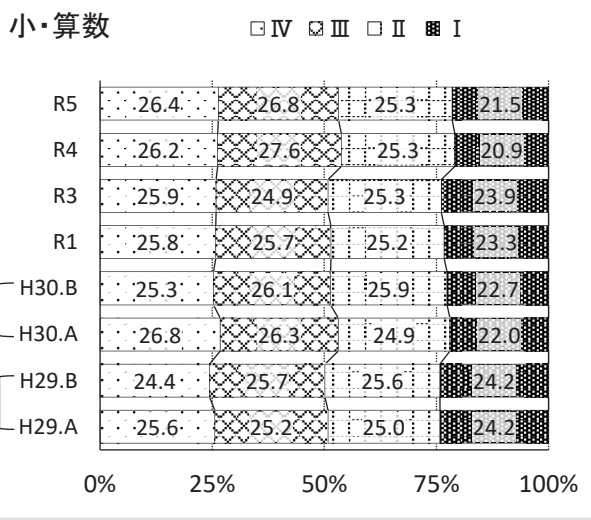
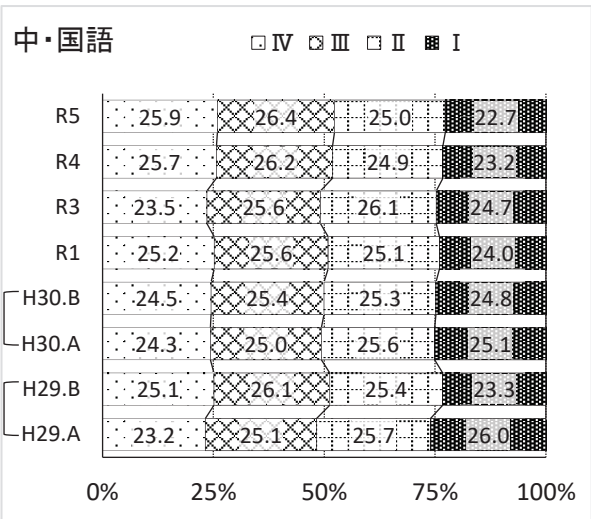
4 分布に着目した経年の状況

全国の受検者を正答数の多い順に並べ、上位から25%ずつ4分割(境界を含む階級の度数を按分することで、4等分となるよう補正)し、それぞれの区分をⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳとした上で、各区分に入る長野県の児童生徒の割合を求めたもの。

小学校



中学校



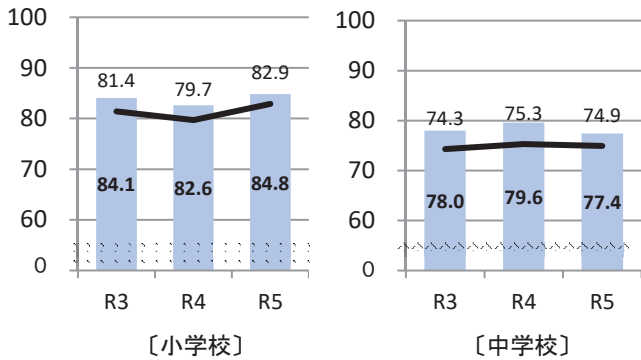
中学校英語は、令和元年度以来、2回目の実施。CBT で行われた「話すこと」調査の結果は含まれない。

5 児童生徒質問紙調査の回答状況

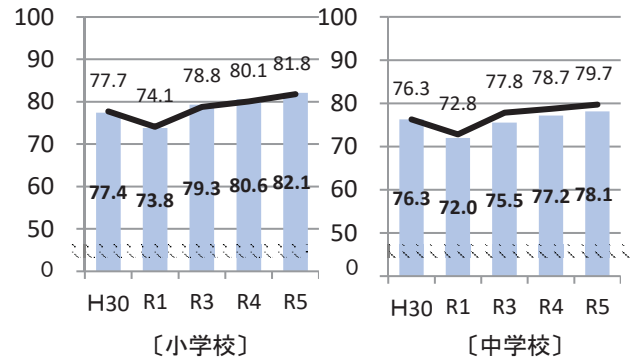
※「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答の割合



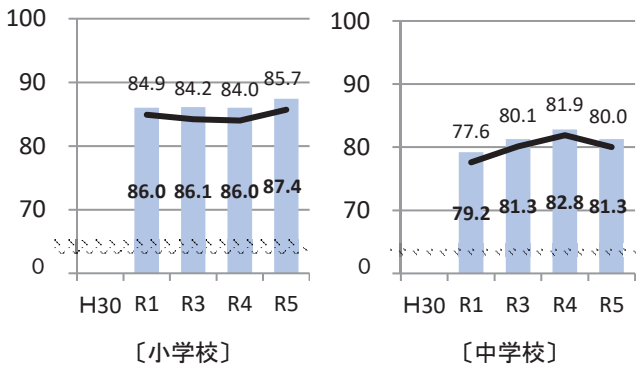
① 授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間などになっていた



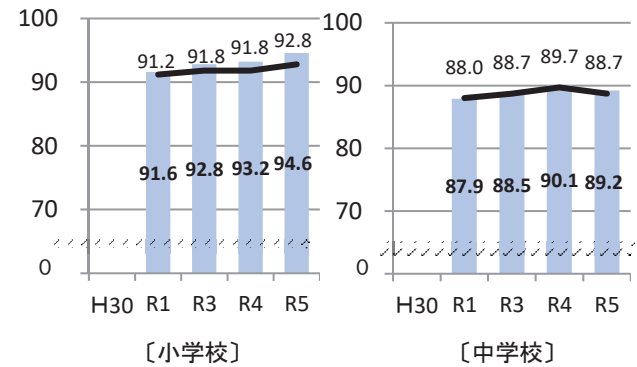
② 学級の児童生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる



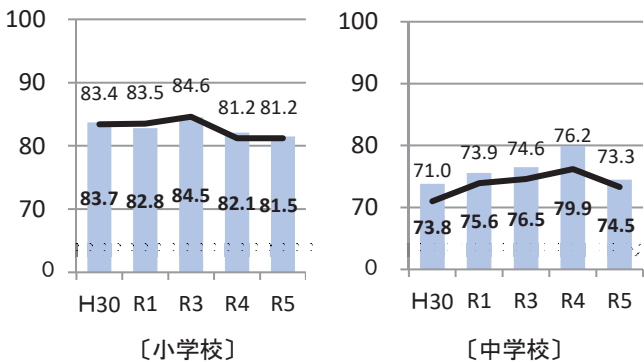
③ 国語の授業の内容はよく分かる ※H30は調査項目なし



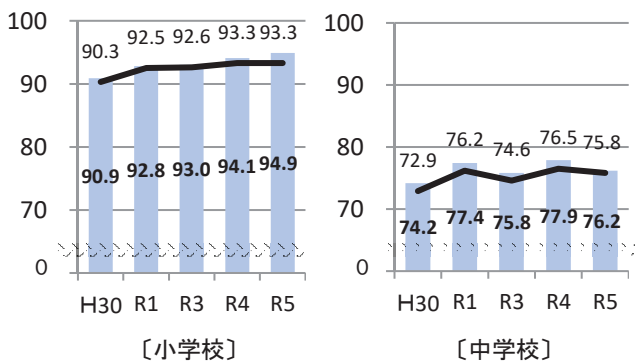
④ 国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う ※H30は調査項目なし



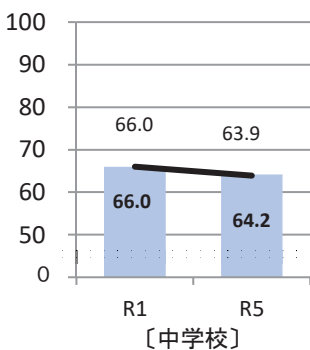
⑤ 算数・数学の授業の内容はよく分かる



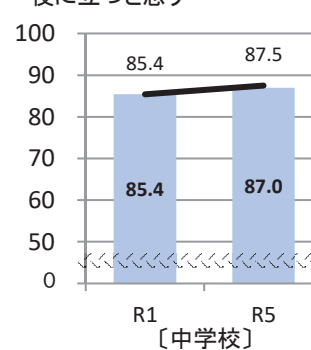
⑥ 算数・数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う



⑦ 英語の授業の内容はよく分かる



⑧ 英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う



授業が自分に合った教え方などになっていると感じている児童生徒の割合は、全国同様、昨年度より児童は増加し、生徒は減少したが、児童生徒ともに全国よりも高い。また、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている児童生徒の割合は、全国と同様に増加した。

国語については、「授業の内容が分かる」と回答した児童生徒の割合は全国同様、児童は増加し、生徒は減少したが、児童生徒ともに全国よりも高い。また、「授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童生徒の割合についても、「授業の内容が分かる」同様の傾向が見られた。

算数・数学については、「授業の内容が分かる」と回答した児童生徒の割合は、児童は昨年度並みであるが、生徒は昨年度より5ポイント程度減少した。また、「授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童生徒の割合はともに全国より高い。

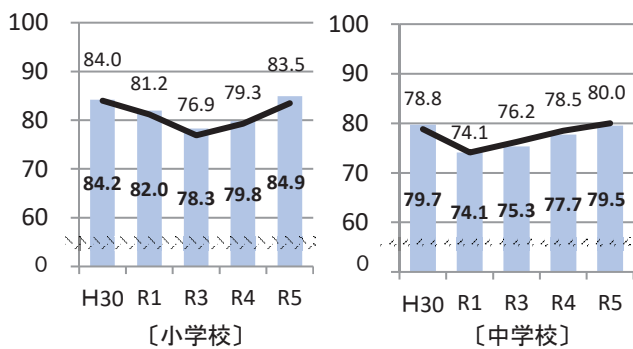
英語については、「授業の内容が分かる」及び「授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した生徒の割合は、全国同様の傾向が見られた。

6 児童生徒の様子や ICT の活用状況

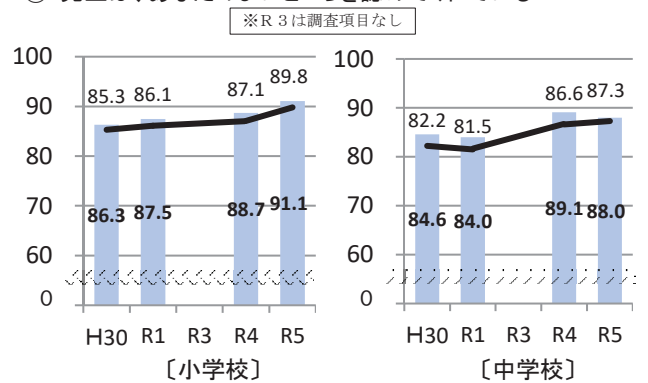
児童生徒質問紙調査



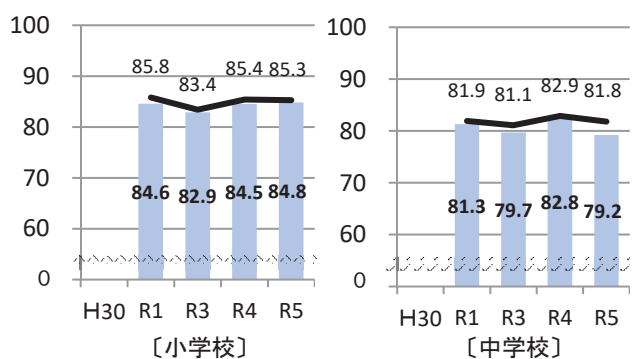
① 自分には、よいところがある



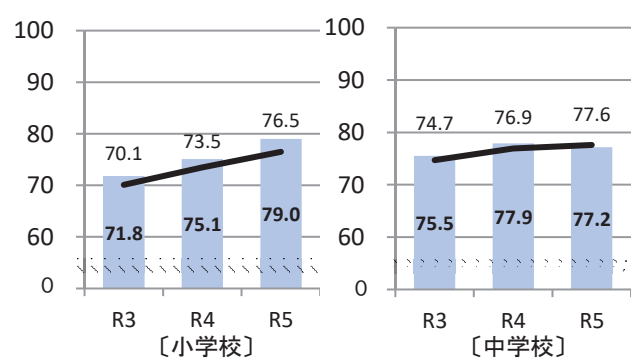
② 先生は、あなたのよいところを認めてくれている



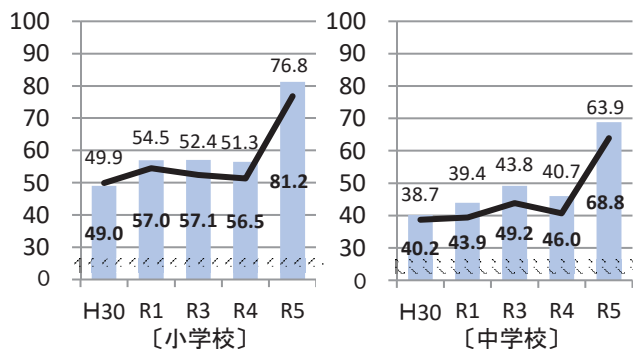
③ 学校に行くのは楽しい



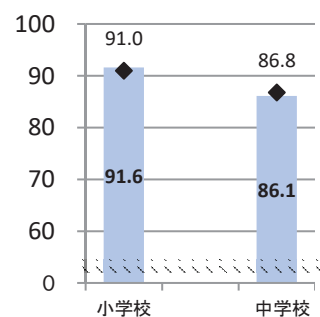
④ 自分と違う意見について考えるのは楽しい



⑤ 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う(R5) 地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある(~R4)



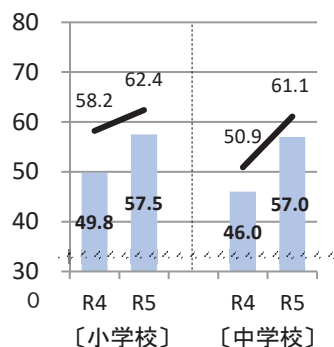
⑥ 普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがある



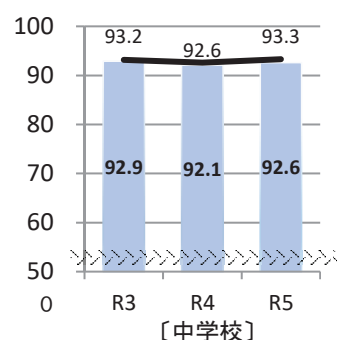
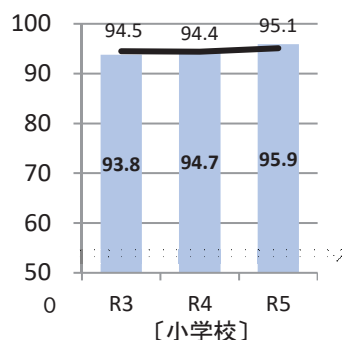
「自分には、よいところがある」と思っている児童生徒の割合は、全国同様に増加し、特に児童が8割を超えている。また、「先生は、あなたのよいところを認めてくれている」と感じている児童の割合は、9割を超え、生徒の割合は、全国が昨年度から増加したのに対し本県は減少したが、全国よりやや高い。

「学校に行くのは楽しい」と回答した児童生徒の割合は、全国を下回っている。「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と回答した児童生徒の割合は、児童は昨年度から増加し全国より高く、生徒は昨年度からやや減少し全国と同程度である。「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と思っている児童生徒の割合は、4～5ポイント程度全国を上回っている。「幸せな気持ちになることがある」と感じている児童生徒の割合は、全国に比べ、児童はやや高く、生徒はやや低い。

⑦ 授業でPC・タブレットなどのICT機器を週3回以上使っている



⑧ 学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思う

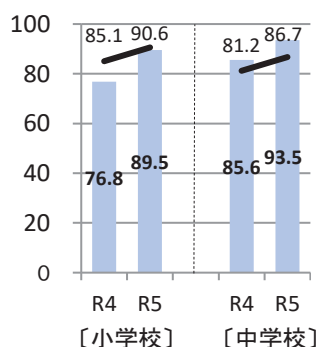


「授業でICT機器を週3回以上使っている」と回答した児童生徒の割合は、全国同様、昨年度より増加し、全国よりも低いもののその差は縮まっている。また、ICT機器を使うのは勉強の役に立つと思っている児童生徒の割合は、全国同様9割を超え高い水準を保っている。

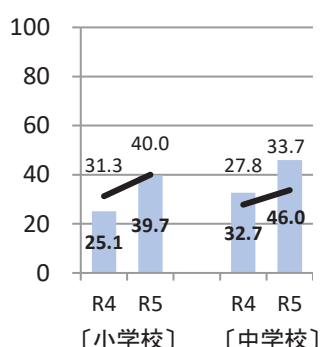
学校質問紙調査

長野県 全国

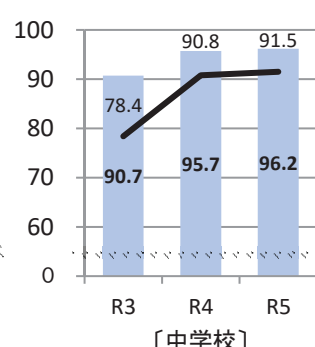
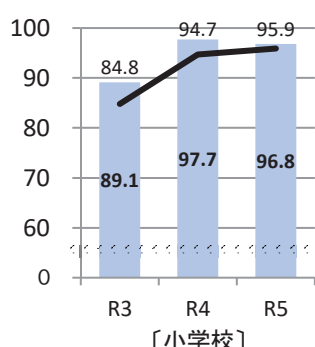
⑨ 前年度までに、一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業で週3回以上活用した



⑩ 児童生徒同士がやりとりする場面では、一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を週3回以上使用した



⑪ 教員がコンピュータなどのICT機器の使い方を学ぶために必要な研修機会がある



児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器について、前年度までに授業で3回以上活用していた学校の割合及び児童生徒同士がやりとりする場面で週3回以上使用している学校の割合は、小学校は全国を下回っているものの全国との差は縮まっている。中学校では全国を上回り、全国との差は昨年度より大きくなっている。

「教員がコンピュータなどのICT機器の使い方を学ぶために必要な研修機会がある」と回答した学校は、小・中学校ともに95%を超え、高い水準となっている。

7 今回の結果を踏まえた重点的な取組

学びの主体は子どもであることから、一人ひとりの「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求し、もっと学びたいという意欲が向上するとともに、自律した学び手として、子ども自ら学びが最適となるよう調整できる授業への改善をめざす。

学びを、知識やスキルの習得に偏ったものから、教科の本質に触れながら探究し続ける中で知識やスキルを獲得し、他者と協働しながら自分なりの「知の体系」を構築していくものへと転換していく授業づくりを支援する。

(1) 各学校の課題に応じた支援

- ・第4次長野県教育振興基本計画に示されている探究を中心とした学びの実現に向け、子どもたちが自ら課題や問いを見出し、その解決を目指して、仲間と協働しながら新たな価値を創造していく授業が展開できるよう、教員研修や学校訪問を通して支援する。
- ・各学校がS-P表*を活用するなどして、補充・補完など、重点的指導を明確にして授業改善に取り組めるよう支援する。
- ・成果が見られる学校に聞き取り調査を行い、その効果的な取組を全県に広め、各学校が分析結果を基にこれまでの取組を検証し、組織的・継続的に授業改善に取り組めるよう支援する。
- ・9月から10月に全ての教員が参加して行われる教育課程研究協議会では、結果の分析を基に育成する資質・能力を明確にした授業づくりのあり方について共通理解が図れるよう支援する。

(2) 市町村（学校組合）教育委員会との連携の充実

- ・地域の課題に応じた学力向上の方策について、GIGAスクール構想の取組も踏まえつつ、市町村（学校組合）教育委員会とより一層連携し、課題解決に向けた改善を図っていく。

(3) 中学校英語への重点的な支援

- ・中学校英語「全国学力・学習状況調査の結果分析・活用」ワーキンググループを立ち上げ、大学教授等の助言を受けながら、パフォーマンステストを含むテスト改善に取り組み、各種研修会や市町村教育委員会の要望に応じて実施する「指導と評価の一体化出前講座」を通して、各学校・学級の課題に応じて重点的な支援をしていく。

(4) 重点対策チームでの取組

- ・正答率の低い問題等についてその要因を分析し、育成する資質・能力を踏まえ、授業でどのような学習活動を位置付けていけばよいのか具体的に提案していく。

* S-P表：Student-Problem score table のこと。設問の正答率順、正答者数の多い順に児童生徒と設問を並び替えた正誤パターン表のことで、調査問題の特徴や児童生徒の反応パターンなどを分析するための手法。教員にとっては授業改善の手がかりとなり、児童生徒にとっては個別のつまずきが確認できるなど、分析に活用できる。